
未来の約束

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の約束

【Zコード】

Z3655BA

【作者名】

ハル

【あらすじ】

両親と叔父が海外転勤。残されたお互いの子供は一緒に住むことに。だが、この時はまだ知らなかつた。相手が超絶美少女の従兄妹だつたとは。そして始まる同棲生活。学校と日常での慌ただしい日々。昔の約束、初恋の人には会えるのか。ラブコメ系は始めて書くので、とにかくおかしいと思います。

同居人は女の子

高校に進学する前の中3の12月。
俺の父親は海外に転勤になつた。

なんでも、アメリカに進出するに当たつて、しばらくは自分で見たいらしい。

そして、母親は父親の方が心配だからと付いて行つてしまつた。
まったく、子供が15歳だつてのに、未だにバカップルやってるん
だから困りものだ。

で、高校は日本の方がいいだろ？。とのことで、俺は1人で家に残
つてたりする。

念願の一人暮らし。

響きはいいが、実際にやつてみると大変なことこの上ない。

まず料理。

今は料理も好きになつてきたのでいいが、最初は何度も物体Xを作
り続けたもんだ。

続いて洗濯。

これはネットで見たらすぐ出来たので問題はない。
知恵袋つて素晴らしい！

最後に掃除。

これが一番面倒だった。

広い一軒家を一人で掃除するのは、予想以上にハードだ。

だつて、今日はまだ見ぬ同居人が来るのだから。

ピンポン

セールス、回覧板、宅配でなかつたら、今日来る予定の人物はただ一人。

「今日からお世話になります。久喜月夜です」^{くきづくよ}

そう。従兄妹が家に来るのだ。
遊びにではない。

従兄妹の子も両親が海外に転勤だからだ。

まあ、俺の父親が経営する会社で働いているから、一緒にアメリカに行くからのこと。

それで、お互いの子供が高校は日本がいい、と主張したのもあってか一緒に住むなら残つていい、となつたのだった。

相手の両親は4月にアメリカに発つたらしいが。

「えーっと、……女の子?」

今日から一緒に住むのが女の子だとは聞いていない。
10年以上も会つていないので覚えていなかつたが、今日からどうすればいいんだ……。

「そうだけど？」

いたつて冷静な彼女を見ると、慌てる自分が馬鹿みたいに思えてくる。

だが、彼女を見て、今日から同棲となれば慌てない方が可笑しいと思う。

彼女は胸ぐらじまである茶髪に、大きな一重の目に、整った目鼻立ちに、それに色白の綺麗な肌。

彼女の第一印象は、こんな巨乳美人は実在するのか…ことだ。

「一緒に住むのが、男だつて知つてたのか？」

「従兄妹つて聞いてたから、知つてたよ」

あつ美人な上に、声まで綺麗だ。つて、今はそんな場合じゃない。

「リビングで適当に賣いでて、用事ができたから」

そう言つて、すぐさま国際電話。時差? 気にするな。

2ホールで出て、男の声の聞こえる。

「あつ、もしもし。父さん?」

『どうしたんだ？急に。いくら日夜ちやんが可愛いからって、いきなり結婚の相談とかはやめてくれよ』

決定。この親は全部知つた上で面白がつてたらしい。

「知つてたなら、何故教えない」

『可愛い息子から、慌てて電話があると思つたから、に決まつてゐるじゃないか』

「心の準備つてもんがあんだけよ。死ね」

それだけ言つて、電話は切る。

少し言ひ過ぎた感もあるが、明らかに父さんが悪いだらう。でも、まあ、言い過ぎたのは事実だし、あとで母さんにメールしとこつ。

「『めん、クソな親を問いただしてた』

彼女は思わず苦笑い。

「いや、いいよ。私のこと忘れてたみたいだし。それより名前聞いてもいい？10年前の記憶だから、間違つてたら嫌だし」

「あつ、名前まだだつたのか。俺は玖珂陽斗くがようと」

彼女の表情がさきほどまでよりも、少し明るくなる。おそらくは、昔の記憶と一緒にだつたのだろう。

「じゃあ陽君、私のことは月夜つて呼んでね。これから一緒に暮ら

すんだから、仲良くやらないことね

陽君とはたぶん昔のあだ名だろ？
まあ、呼び方なんて何でもいいけど。

「わ、そくだけど陽君、私の部屋どーーー。

「あ、案内するから付いてきて。荷物持つから貰って

荷物を渡す月夜は妙に嬉しそうだ。

何かあつたのか？

「どうしたんだ？」

「ん？ だつて、陽君は昔と変わらず優しいなあ、って思つて

俺は全く覚えてないけど、悪い気分ではないし、このままでもいい
か。

「ううだよ」

案内したのは一階の部屋で、家具などはすでに備え付けてある。

「意外と綺麗に掃除されてるし、家具もいい感じ、いい趣味してる
ねえ」

母さんが選んで行つたので、けつして俺の趣味ではない。

「陽君の部屋は？」

「隣」

「じゃあ、覗き穴があるか確認とかなきや」

「ねえよ、それに合つたとしても覗かねえよー」

月夜つて意外とボケ体质なのか？

思わず全力でツツコミを入れてしまった。

「陽君が私の体を見たくないってのは、何かショックだけど、誤解があります。私が覗くための穴です」

この子はいつたい何を言つてこらのだ。
変態なのか？ そななんだな。

「うん、そんな穴もないから大丈夫。でも、月夜の頭は大丈夫じゃ
なさそりだから、とりあえず昼食が終わつたら病院に行こつか」

すでに手遅れかもしけないが、医者に診せるならなるべく早い方が
いいだろ？。

「冗談だよ。私がそんな変態なわけないじゃん」

「冗談じやなかつたら、これから的生活について真剣に話し合わなく
てはいけなかつたからな。

「とりあえず、昼食にするか？」

「私もお腹減つちゃつた」

といつあえずは、昼食だな。

同居人は女の子（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

ショッピング

「陽君つて料理上手いねえ」

「始めたのは数ヶ月前なんだけどな」

今までには自分しか食べる人がいなかつたが、誰かに食べてもいいのは、また違う楽しみがあるもんだ。

「うーん、毎日食べたいぐらい美味しいよ」

「一緒に住む」とになったんだし、料理ぐらい俺がやるぞ?」

「それは楽しみ。だが、しかし、料理と洗濯は私がやります。掃除は大変だから2人で」

会話の流れを完璧に無視されてしまったなあ。
けつこう扱いがめんどそだ。
まあ、可愛いから許すけど。

「料理か洗濯のどちらかは俺がやる」

「料理はたまに作つてよ。洗濯は私がやります。陽君が私の下着を合法的見たい、って言つなら考えるけどね」

「洗濯は任せる」

返事までかなり早かつたと自分で思う。

椅子に座つて、拗ねたように唇を尖らせる月夜に、一瞬見惚れてし

まつたのは内緒だ。

「ねえ、昼からはちょっと買い物行かない？」

「教科書も買わないといけないし、別にいいぞ」

月夜はやつたあと喜んでいるが、数時間後に荷物持ちをさせられる自分を想像できた。

「意外とおつきいね」

最近リニューアルした、この辺りや一番大きいショッピングモールだから当たり前だ。

「ここの辺りや一番大きいからな」

「ふーん。上から見て行く、でいいよね？」

別に順番なんてどうでもいいのだが、適当に頷いて答える。

そして、いきなり問題発生。

最上階は映画館とゲームセンターと飲食店のみ。

最上階に着くと、全体を軽く見てまわり、ゲームセンターに入つていく。

「おーい、今回の目的を忘れてねえか？」

「陽君も早く来てよ。記念だから」

連れて行かれた先はプリクラだった。

「ハハハのつて、恋人同士で撮るもんじゃ？」

「そんなの法律で決まつてないもん」

確かにそうだが、そういう問題でもない気がする。

「まあ、月夜がいいならいいけど」

「やつたー

プリクラを撮り、携帯に送られてきたプリクラを送信するために、アドレスの交換をする。

「じゃあ、次の階だな」

三階と二階は主に雑貨や洋服店なので時間がかかった。

月夜がいろいろ店を周り、気に入ったのがあれば購入で、けつこう時間がかかったのだ。

「次はどこに行くんだ？」

「ん？ 陽君が教科書つて行つてたし、本屋さんかな」

そう、俺の本来の目的は本屋で教科書を買つこと。

このショッピングモールの本屋は、もともと教科書も扱っていたので、基本的に何でも揃うのだ。

「本屋をさういへどもあるの？」

月夜は目的もなく歩いていたので、本屋の場所も把握していなかった。

「このフロアの端つ」

そういつて、俺が先を歩いて先導する。

「私つて兄弟いなかつたけど、いたらこんなに楽しいのかなあ

「俺も一人つ子だからな、分かんねえなあ」

「ふ～ん、陽君つてお兄ちやんつぽいし、お兄ちやんつて呼んであげよつか？」

思わず自分の足で躊躇つて転びそうになつた。

同じ年だから、それは少し違つう氣がするんだがなあ。

「絶対嫌だ」

「えー、何で何で？」こんな美少女が呼んであげようとしてるんだよ？

「自分でいつな

類を膨らませて、抗議の眼差しを向けてくる円夜が、不覚にも可愛いと思ってしまったので、スルーしておいた。

「お兄ちやんひして、彼女とかいるの？」

「お兄ちやんひして呼ぶな、気持ち悪い」

「です。一瞬ドキッとしました。

世のお兄ちやん諸君は、こんなにも羨ましい体験を、日々しているのかと思つと、奥めしく想つてしまつましたよ。

「じゃあ、陽君は彼女いるの？」

「いた」ひびくなるんだ？」

「彼女に誤解されなこよひな距離感を持つて接します」

「いなかつたら」

「尊になつてもしうがなこの精神です」

「わあ、正直に答えるとめんどくだなあ。

てか、尊になつてもつて何だよ。

「じゃあ、こるひ」と

彼女いないけど、こると思つてくれたら、学校では平和に暮らせただ。

なんたって、こんな美少女と付き合ってるなんて噂になつたら、嫉妬に狂つた男子に刺されるかもしれない。

「その反応は彼女いないんだあ。でも、安心してよ。私も学校での位置付けとか、キャラとかもあるから、そんなことはしないつもりだから」

そんなこととか、噂になるような行動だらう。キャラとか位置付けも気になるが、学校でのことはず安心つてことだな。

「あつ、大きい本屋さんだねえ、陽君の分の教科書も探してくるね」

「よろしく」

同じ高校で同じ年だから、買い揃える教科書も同じなので、それほど手間でもないはずだ。

なので、俺は本屋の中ですくなく読書するための、椅子と机のあるところで、ゆっくり休憩することにした。

20分程経つてから月夜が帰つてくる。

「どうだつた？」

「なんかねえ、全部売り切れだつたから、入荷して家に送つてくれるつて言つてた」

もう重い荷物が増えないと思うと、なんだか気持ちが楽になつた。

「じゃあ、一階で買い物して帰るか

「そだねえ。あつ、晩御飯は私が作るからね

「分かつた分かつた

「一日過ぎ」して、何となく扱いが分かつた気がする。
そして気付いた、だいたいは言う通りにさせた方が、後々楽なこと

「」。

「夜食は私だからね

「意味分からんし、いらない

またも月夜が頬を膨らませる。

思春期真っ只中の男の子を、からかうのは止めてもういたい。

「もう、陽君は釣れないなあ」

「いいから、行くぞお」

「はーい

元気に返事する月夜と食料品を買って帰るのだった。

その日の晩御飯、月夜が作ったカレーは、今まで食べたカレーの中でダントツで美味しかったです。
負けた気分で悔しい。

ショッピング（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

入学式（前書き）

入学式は2行ですべき……。

入学式

「陽君起きなよ」

朝目覚めると、俺の竹刀を持った少女が視界に写りました。

「月夜、ちょっと待つてくれ。状況を整理する」

そう、月夜と同居することになつてから一週間。

せつかく教科書も買つたし勉強しよう、との気分にはなれなかつた。

おかげで、モンハンでもう一ヶ月データを作ったG級まで行つちまつたぜ。

だつて、分かるだろ？

最初は男を作つたから、次は女のデータを作つてみたいつて。

ようはそれ。

そして、この一週間は最低限の生活以外は、月夜とひたすらモンハンに励んでいた。

つて、今はそんなの関係ない。

目の前で竹刀を持った月夜についてだ。

よし、夢だ。

そういう設定にしておこう。

「夢の中の月夜も可愛いぞ」

「えつ、そう？」

顔を真っ赤にしてモジモジしている。
これは、俺の勝利じゃないのか？

「ああ、夢なら早く覚めてくれ

手を広げて天を仰ぐ。
実際は天井なのだが。

「馬鹿なこと言つてないで、朝ご飯できたから顔洗つてきてよ」

さっきまで馬鹿みたいな反応をしていたのは誰だ！…と叫つてやりたいが、竹刀が怖いので言いません、はい。

「今、行く

洗面所に直行して、冷水を顔に。

「死にやう

蛇口を捻つてすぐの水は、予想以上に冷たかった。

暑いのも寒いのも嫌い。

冬服から夏服への移行期間ぐらいうちにうどいよな俺には、朝一の冷水は身に染みるものがある。

「あつ、やつと来た

食卓に並べられているのは

「ご飯、味噌汁、焼き魚、漬け物、リンゴ半分だった。

なんとも栄養バランスを考えた食事。

「朝から健康に気をつかつてるな」

「逆に朝だから、つて考え方もありだね」

まあ、どうりでもいい。

「今日は入学式だね」

「？ そういうえば、そうだったな」

朝から起こしにきた理由はこれが。

入学式は10時からだが、9時からクラス掲示と簡単なH.R.があるらしいのだ。

「一緒に行こうか」

「別にいいけど」

一緒に行つたからって、何かが減るもんじゃない。

それに、俺には中学からの友達がいるが、月夜にはいないしな。

「やつた」

小さくガツツポーズを決めているが、そんなに嬉しかったのだろうか。

まあ、知り合いと一緒の方が、心強いのは分からなくもないが。

「じゃあ、8時20分に出よ」

「まあ、そんなもんだな」

俺達が通う私立青葉高校は、家から徒歩15分と、それなりに近いのだ。

「じゃあ、食べた食器は流してお願いね」

「りょーかーい」

「もつ、一回二回を一週間も言われ続けたら、誰でも分かる。」

「んじゃ、俺は着替えて、歯磨いてくるから」

そうこうして、着替えて洗面所に向かう。

「じゃあ、後はやつとくから、月夜も歯磨いて、準備して来いよ」

「うん。ありがと」

もう、月夜が洗い終えてしまい、後は拭いて食器棚にしまつだけ。

それも終わったころに、月夜も終わっていて準備は完了。

「……」で時計の確認。

「……8時」

言ことよつのない感情がこみ上げてくる。

いつもなら、この時間に出ればいい。

だが、入学式はいつもより遅いから、早く用意する必要はないのだ。

よって、残った中途半端な時間の使い方は困ってしまいます。

「テレビでも点けよっと」

これは絶対に死亡フラグだな。

テレビを点けて、20分に出れるわけがない。

「なぬっ！？ラスカル……だと」

そう、テレビでやつてたのは、世界名作劇場だ。

NARUTOが何故入らない？

と聞きたいたが、完結してないからと、自分を無理矢理に納得させている。

世界名作劇場、しかもラスカルなど、見るなと言つ方が無理な話だ。

そして、時は進み8時半。

エンディングまでバツチリ見ていると、予定時間を過ぎてしまった。

それでも余裕があるが、何となく負けた気がする。

いや、ラスカルが悪い。

小学校の先生が教室に、ラスカルのぬいぐるみを置いていたが、一年経たずに殉職したからなあ。

「陽君、早く行こ！」

「分かってるって。そんなに焦らなくても余裕だぞ」

まあ、入学式なんてイベントだし、興奮する気持ちも分からなくはないが。

「今日と同じ日」、一年が掛かっていると言つても過言じやないんだから

いやいや、過言だろ。

クラス発表つて、そこまで重大なイベントか？

「陽君と同じクラスになつたらどうしよう。……キヤー」

月夜は顔を赤くし、手を頬に当てながら騒いでいる。

「重症だな。いつそ安樂死させた方がいいかもな

「ひどい！それでも未来の旦那なの？」

頬を膨らませた月夜は、何か小動物みたいで可愛い。

イジメたくなつちゃう感じだな。
だが、聞き流せない単語も含まれていたが。

「なつた覚えはない」

「じゃあ、未来の『主人様』

「月夜が言つと、卑猥に聞こえるから止めてくれ」

「卑猥じゃない』『主人様』を教えてほしいぐらいだよ

ため息を付きながら月夜は言つてゐるが、そろそろめんじくさくなつてきた。

「じゃあ、俺先に行くわ」

月夜の方は見ずに、玄関に直行する。

「つそりや、置いてかないでえー」

月夜が半泣きになりながら追いかけてくる。

お前は子供か！

そして、無事に学校に到着。

人が多いので月夜とははぐれてしまつたが、家で会えるだろつと無

視を結構中。

とりあえず、クラスを確認しておく。

「……C組か

他の名前は、教室に行ってからのお楽しみ、つことで確認しない。

「陽斗」

後ろから声をかけられたので振り向いて確認する。いや、親友の声なのは分かつていたので、確認するまでもないが。

「修は何組？」

声をかけてきたのは、立花修。

高校からは、バイト戦士になると意気込んでいた、中性的な顔の親友だ。

修と遊びに行くと、必ずナンパされてるからネタだ。それも男に。

「僕はC組です」

「俺もC組だから、一緒に行こうぜ」

うん。と頷いて修が後ろに付いてくる。

教室までは案内掲示があったので楽に着いた。

「やっぱり知らない人もたくさんですね」

「そうだな」

ザツと見た感じだと、知ってる奴は10人ほど。
喋る奴と言えば、親友の修ぐらいしかいない。

まあ、入ったばっかはこんなもんか。

「俺の席は……後ろから2番目か。なかなかいい感じだな」

「僕は右隣です」

名前の順だと、意外と近くなるもんだ。

それからじょじょじょ、俺の席で修と喋る。

春休みのことなどを喋っているが、従兄妹が居候したことしか伝えていない。

だつてねえ、何かからかわれそつだし。

ドンッ

後頭部に鈍い衝撃が伝わる。

急いで後ろを振り向くと、鬼のような形相の月夜がいた。

「……どうしたんだ？」

「陽君に置いてかれた。私を置いて陽君は浮氣してた」

あー

最初は何のことか分からなかつたが、全て理解した。

修が女顔だから、女子と間違えたのか。
いや、でも浮氣はないぞ。

月夜と付き合つてゐるわけではないし、そんな予定もないのに、浮氣
なんてあるはずがない。

「陽斗、彼女？」

「違う」

「違います」

「妻です」

「ヤニヤしながら修は言つていたが、月夜と揃つて同時に否定する。

教室が静寂に包まれる。

そりや、入学式当日に人を鞆で殴つたら、一瞬でも注目を集めむ。

さらに続いての浮氣発言で、クラスの目は釘付けだったのだ。
そこに、月夜は最後の爆弾を投下し、止めをさしたのだ。

「陽斗、結婚してたんですね」

「この親友は悪ノリが過ぎる気がする。」

「んなわけねえだろ。月夜も「冗談はやめろ」

「テヘッ」

舌を出す仕草は可愛い。

それは認めるが、月夜も悪ノリが過ぎるようだ。

「まあ、冗談です。それで陽君、そちらの可愛い方とは、どうのうな関係で?」

俺と修はお互いに顔を見合させて苦笑い。

そして両方が思つ。

ああ、いつもの勘違いか。

女の子に見られがちな修はもう馴れたもんだが、まさか俺の彼女だと思われるとはな。

「こいつは親友の立花修。見て分からぬかもしねーが、男だ」

「よのじへ

男だと聞いて、月夜は固まってしまった。

そして、それが解けると一言。

「人体の神秘ね」

俺もそう思うが、たぶん違うぞ。

「月夜の席はどこなんだ？」

「後ろ」

後ろとは、俺の後ろって意味だろ？
まあ、確かに『玖珂』と『久喜』なら前後になるな。

絶対に授業中に何かしてきそうだ。

初老の担任の挨拶も終わり、体育館に移動。

異常に長い校長の話を聞いて、入学式は終了。

その後も教室に戻り、簡単に自己紹介をして終了と言つ、クラスを見に来ただけの一日だった。

帰りに修に

「もう陽斗は魔法使いになれる資格は失ったのですか？」
と聞かれたので、殴つておいた。
絶対にあるわけがない。

何故、魔法使いなのかと言つと、アレですよ。
ネットの都市伝説です。

月夜も最初は分からなさそうだったので、教えず、調べさせずにしておいた。

これからの中学生生活は、月夜がいたら、何故か退屈しなさそうだ。

入学式（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

夢（前書き）

この作品にとって大事な伏線を張った回ですね。

「陽君ひしてあ、学食派、それともお弁当派?」

「俺は時間があれば弁当派だけど」

朝食後に用夜がもじもじしている。
なんか怖いから止めもらいたいのだが……。

「じゃあたあ陽君。お弁当作ってあげよつか?」

「どうちでもいい」

つぐよが頬を膨らませたのが、よく分かる。

「なら、私の作ったお弁当のあまりの美味しさに驚くといこよ

いや、いつも作ってる飯と何か変わるものだらつか。

弁当だけ格段に美味くなるなら、是非とも普段の生活でも実用して
もらいたいもんだ。

「今日は無理だらうから明日から楽しみにしつくわ」

月夜がニヤニヤと笑つてゐるが、いつこう顔をする奴はいい奴がない
ないと、俺の人生経験が告げてゐる。
何か企んでるにちがいない。

「ちなみに中身は全部おぼきだよ」

「何故にそのチョイス！？」

反射的に返してしまったが、たぶん「冗談だろ」。
いや、「冗談であつてほしい。
おはぎは好きだが、弁当となるとな。

「冗談だつて、さすがにおはぎは入れなによお

「だよな。 そうでなかつたら焦る」

「でも、何が入つてるかはお楽しみだよお？」

うつわあ、凄く不安になる要素だけ残しやがつたよ。

「グロイ系はやめてくれよな？」

「それは態度次第です」

不安要素だけを残して、この日は学校に行く。

「あれ、陽斗は学食なんですね」

「今日はな。 寝坊しちまつたから」

起きた時には、弁当を作れる時間が過ぎていたのは本当だしな。

「なう、僕も弁当を食堂に持つて行つて食べます」

「私も学食。初めての学食」

修と月夜も学食参加が決定。
まあ、月夜の方は知つてたが。

「あたしも付いてつていい?」

「げ茶がかつた少女がいた。

中学の時は女子バスケ部に入つていて、その影響かスラリとした体型、ショートヘアの活動的スタイル。
そして例の「とく美人系。残念なのは胸のあたりか……。
いや、これはこれで需要があるのかもしれないが。

「どじ見てんのよー」

「どつやら、無い乳のことばシークレットだつたらし。」

「いや、彩がこのクラスつて知らなくて」

「あんたの右斜め後ろにござつといったでしうが!」

「いや、いたか?」

「昨日の入学式はいなかつた氣がするんだがなあ……。

「昨日もいたか?」

「昨日は行く意味感じなかつたから、休んでたのよ

「さいですか」

「どうやら、俺と月夜と修は休みたいと思いつつ来てしまう人、彩は

一步踏み出す勇気を持つていて堂々と休める人。
俺たちとは少し思いつきりが違うなあ。

「なら知らん。俺はずっと寝てたからな

「僕は少し喋りましたけど、陽斗が声かけるのかと思つてましたよ
俺は一時間目から四時間目までは、基本的に寝てるので周囲が把握
できていなかつたらしい。

「ねえ陽君、この子誰？彼女？」

昨日に引き続き月夜が、意味の分からないことを言つてゐる。
スルーしたいが、したら何かされそุดだなあ。

「」こつは戸川彩。中学からの友達だ

「彩つて呼んでねえ」

「よろしくあやや、私は月夜でいいよ。ちなみに陽君の従兄妹で妻
だから。でも、略奪愛は上等だよ？敵は多い方が燃えるからね」

彩の言つてること無視して、変なあだ名付けるし、変なこと言つて
るしで、とりあえずソッコリビンが満載だな。

「うん、あたしは陽斗君が好きなわけじゃないから大丈夫」

本人の前で言われるだけつゝ傷つくものがあるな。
彩の好きな人は知つてゐるけどさあ、修だつて知つてゐるけどさあ、も
うちょっとオブラーートに包んでほしかったですよ、はい。

「なら安心。じゃあ、あややも行いつけよ」

月夜が右手で俺の手を左手で彩の手を取つて進みだす。修は苦笑いを浮かべながらも付いてくる。

そして、食堂までの廊下。

ずっと見られた。もう凄い勢いで。まず、ガン見するか、一度見するかの反応だった。

だつてねえ、修は中性的なイケメンだし、月夜はかわいい系、彩は美人系。

そんな3人と普通な人の俺ですよ？

女子や男子からの嫉妬の視線が痛いです。

「お前らみた的な人生勝ち組と歩いてるとイライラしてきた

「いたつ、……痛いつて」

ムカついたので、修のこめかみの辺りをぐりぐりしついた。

「陽斗は中学の時からそういう言いますけど、みんなが見てるのは陽斗ですよ？」

うん、確かに嫉妬の視線は中学の時からずっと感じましたよ。

「お前らといふると嫉妬の視線に殺されそうなんだぞー！」

修があからさまにため息を吐く。

いつたいなんだというんだ。

「陽斗って今まで何回ぐらい告白されたか覚えてます？」

「友達としてならけつゝつあるけどなあ」

「陽斗に告白した人たちが可哀想です」

「そんなに言う必要があるだろうか。

友達としての告白なんだから、別に可哀想でも何でもないだろうに。

「僕が知ってる限りでも、陽斗に中学時代に告白してる人は、上級生、下級生問わず40人～50人はいました」

「陽君つてそんなにモテてたんだ！妻としては心配です」

「俺の知らない新事実。あれは友達宣言じゃなかつたのか……。
てか、月夜の言つてる意味が理解できない。

「まあ、いいや。終わつたことだし」

「またも修がため息+苦笑いを浮かべる。

ちなみに食堂で食べたのはカツ丼だった。

だってねえ、なんか近くの席で食べてる人が美味しいしそうだつたんだもん。

その日の5時間田と6時間田も無論寝てた。

一日何時間寝るんだよってべらこに寝てた。

そして、夢を見た。

「 ほんたちが、おつきくなつたら、あけるんだよ? 」

「 よーくんも、わすれたりしちゃダメだよ? 」

少女と言うよりもたぶん幼女が話しかけてくる。

だが、夢の中の記憶は曖昧で、彼女の顔と名前が思い浮かばない。そこだけ、虫食いにあつたかのよこ、真っ黒な世界に塗り潰されているのだ。

「 これをあけるときは、ほんたちがおつきくなつたとき。そのときは、あけないやくわく 」

「 ほのなかのことも、やへそへだよ? 」

「 うん。 」

最後は俺の元気な返事。

箱を埋めたのまでは分かったが、ビビンて誰と埋めたのかまでは思い出せない。

「 陽君、起きなよ。帰るよ? 」

目の前には月夜の顔。

周りには修と彩がいる。

どうやら眠っている間に、他のクラスメイトは帰つたりしい。

「いい夢見れたの？」

「月夜見えたか？」

自分ではどんな顔をしてるのかまでは分からない。

「なんか嬉しそう…かな？」

「まあ、月夜がそう思うんなら、そんなんじゃね」

俺は久々にこの夢を見たのだ。嬉しくないはずがない。だって、夢の中の彼女は俺の初恋の人だから。

今はどこで何をしてるのかも分からない。

でも、大きくなつたその口には、必ず会えると信じてる。

夢（後書き）

この先の展開はおおまかには頭の中にあるが、長く続けることも、短くすることもできてしまう。
さて、どうじよひ。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

お弁当

「あ、陽君おはよー」

学校のある生活に、早くも適応したので、今日は月夜に起られるまでもなく、自分で起きた。

「おはよう。？弁当？」

朝食はすでに準備されていて、月夜は弁当の準備をしていた。

「さうだよ。陽君のは詰め終わって、私のを詰めたら完成だよ」

俺の弁当箱らしきものは、すでにケースに入っていた。

月夜の詰めかけの弁当箱を見る限り、今日の昼はかなり期待できそうな気がする。

「はい完成。じゃあ、朝ご飯も食べちゃおつか

そつ言つて、2人で食べ共同で片付けを終わらせる。

そして、待ちに待つた昼休み。
つまり、昼食の時間。

席は俺と修が席をくつつけて、月夜と彩が椅子を持ってきてこる。

彩は修のすぐ近くに座れて嬉しそうだ。
なんか、かなりドキドキしてるので、甘い空気がこちらまで流れ
てくる。

とりあえず、お約束なので言つておこう。

「リア充、爆発しそう」

まあ、修と彩は付き合つてないのだが、この辺の、周りがどう
感じるかが重要だと思つわけですよ、俺としては。

「じゃあ、食べよっか

そう言つて、月夜が開けた弁当はかなり美味しそうだ。
未完成の段階から思つてたが、完成品は尚悪い。

「ああ、陽君も早く開けなよ」

俺も弁当箱に手をかけ……

あつ、俺と月夜の弁当って同じじゃね？

修は知つてゐけど、彩は知らない。

俺がここで弁当を披露すると、絶賛誤解をされると詰つついイベントが待
つてゐる。

そこで、月夜の顔を確認する。

「どうしたの？」

かなり一いや一いやしていた。

確信犯キター——！

噂になつても、月夜には何もメリットは無さそうなのに、何故こんな手のこんだことをするのだろう。

「陽斗、大丈夫ですか？」

「陽斗君、なんか凄い汗かいてるよ？」

気が付いたら、冷や汗をダラダラ流していた。

それにもしても、ここまで心配してくれると、友人に恵まれてるな。従兄妹には恵まれなかつたみたいだが。

「陽君、大丈夫だよ。陽君が心配してるようなことは、起きないから」

月夜が安心をせるよつに言へ。

今はこの笑顔が天使のよつです。

さつきの一いや一やは気になるが、今の心配が無くなつたのなら、大丈夫だね。

そう思い、弁当箱の蓋を開けて……

言葉を失つた……

「なんだ……これ？」

弁当を開けると、そこは、安倍川餅になつていた……。

弁当を開けると、一面が黄粉のよく分からぬ色で一色だつたのだ。

「陽君つて甘党だつたんだあ」

わざとらしく月夜が言つ。

その顔は、イタズラが成功した子供のような顔をしていた。

修は事情を分かつてゐるからか、同情の眼で見つめながら、溜め息を吐いた。

彩は口をパチパチさせていた。

言葉も失つたっぽい。

「あー、月夜は俺の弁当が、こんなになつてゐる理由知らない？」

「私にも分からぬよ。もしかしたら、モテまくりな陽君に嫉妬した誰かがやつたんじゃない？」

2人ともわざとらしく話し、修は尚も苦笑い。

「まあ、いいや」

安倍川餅の一つを口に運ぶ。

「つめ代ー」

素直に感想が漏れた。

はつせり言つて、予想の一段階ほど上の美味をだつた。

そして、その日の学校も無事に終わり、放課後へと突入する。

「おい月夜、アレは何だつたんだ?」

「アレつて何のこと?」

分かつてるだる。オイ、コラ、白状しろや。証拠は拳がつてんだよ。みたいな目を向けると、『あー』と、納得したような声を出す。

「安倍川餅はね、私が好きだから入れたの。私も陽君と同じにしようと思つたけど、カロリーがね」

苦笑いして、お腹をさすりながら言つ。

「じゃあ、安倍川餅が好きなら、月夜があんまり好きじゃないもの入れてくれ」

これなら、普通の弁当になる気がする。

ん？普通のにしてくれで良かつたんじゃ……、まついつか。

そして、次の日。

「陽斗って、和菓子が好きって設定あつたっけ？」

「陽斗君はカロリーを気にしない。ある意味で勇者だね」

「心配ありがと」「そこまです。

俺も自分のカロリーが心配になつてきました。

「なあ月夜」

「なあに？」

「何で、俺の弁当がおはぎだけなのかつて分かるか？」

犯人なんだから、月夜に聞くのが一番早い。

「それはねえ、陽君が昨日、『あんまり好きじゃないもの』を、入れろって言つたからだと思つよお」

まさか、あの時の会話の意味はこれだったのか……。

月夜はたしか、『やすがにおはぎは入れない』と言つていた。

まさか、それの意味あることが、『おせきはあんまり好きじゃないから入れない』ってことだったのだ。

普通は弁当におはぎは可笑しい。
ではなく、好き嫌いの問題だった。

まさかの展開だ。

今後は月夜の言動にも、注意しないといけないかもしれない。
ちなみに、おはぎは美味しかった。

だが、口の中が甘々になり、水が無かつたらヤバかったかもしれないが。

「月夜、明日からは俺と同じ弁当で頼む」

「ん？ せつちの方が楽だし、いいよお」

何とも氣の抜ける対応だ。

一日も悩んでいた自分が、馬鹿らしく感じてきた。

これで、弁当問題は解決！

と思っていた。

俺は

月夜のネタ弁当を食べるか

月夜と同じ中身の弁当を食べる。

その一つしか選択肢を考えてなかつたが、今はまだ気付かなかつた。

両方の選択肢がハズレだったとは……。

お弁当（後書き）

誤字・脱字。質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

好きな人

今は昼休み。つまり弁当の時間だ。

そして、今日もいつも通りの4人で食べる。

例の「」と「」。弁当の蓋を持ったところと、いろいろなことが頭を巡る。

これって……開けたら、月夜の同じ中身なんじゃね？

弁当初日の疑問が、再び持ち上がる。

「どうしたの？陽君」

月夜が期待に目を輝かせている。

だが、ここで蓋を開けてしまえば、俺と月夜が付き合つてゐるのでは？などの噂になつても困る。

てか、月夜はそれでいいのか？

いや、一緒に住んでて分かつたが、月夜は俺が驚いたり慌てたりするのを楽しむ、快樂主義者のような奴なのでは？と言う疑問があがつているのだ。このぐらいは気にしないのかもしれない。

「あ、ああ

月夜に生返事を返し、一思いに蓋を開ける。

中身は月夜と同じ。だが、少し俺の方が量が多くくらいだった。

「あーっ、陽斗君と月夜ちゃんの弁当の中身一緒にだあ。ねえねえ、もしかして一人つてそういう関係?」

そう、こつなるのが分かつてたから嫌だつたんだ。

彩は自分の恋愛話をされるのは嫌なくせに、人の恋愛話にはかなり積極的だ。

普通はそんな人間は嫌われそうな気もするが、彩に限つて言えばそんなことは全くない。

それも彩の人徳の成せることなのかもしれない。

「違つ

俺の否定に、彩はつまらなさそつに興奮を静める。

だが、そんな俺の反応とは逆に、月夜は顔を耳まで真つ赤にさせている。

「じゃあ、陽斗君と月夜ちゃんの弁当が、一緒につて偶然?」

偶然ではなく必然なのだが、この場合はどちら上手く回避できることだろうか。

そんな考えをしていのちに、月夜が真つ赤になりながら呟く。

「私が陽君に作つたから。従兄妹だしね」

「ナイス月夜。なかなかいい返しだつた。

「これなら彩だつて分かつて

「ふーん。でも、従兄妹でも普通そんなことしないんじゃない?」

「れなかつたみたいです。

「月夜は俺ん家に下宿してゐるからな」

彩は両親の海外転勤の話を知らな。こ
なら、これで特に問題はないはずだ。

「そつなんだあ。じやあ、月夜ちゃん、陽斗君に襲われそつこな
つたら殺してでも招附するんだよ?」

「襲わねえよ。」

「襲つてくれないの?」

「何でお前のリアクションがそつなんだよ。」

上田遣いの月夜は可愛い。
だが、従兄妹でも越えては行けない一線、つてあると想つわけです
よ。

そんなことになつたら、この先の同居生活がどれだけ氣まずいこと
になるか。

「陽斗には好きな子いますしね」

「修よ、この場面でのその爆弾は投げしちゃダメだろ。」

「陽斗君、だれだれ？あたしの知つてゐる子？」

「陽君、浮氣ダメ、絶対」

彩はテンプレートな聞き方で聞いてくる。

正直に言つとい、その問い合わせようとする顔が怖いです。

月夜はよく分からぬ。

言葉のキヤツチボールができるのかも怪しくなつてきた。

「お前らの知らん奴だ。言つても分からんし、言つ必要はなし」

「陽君、信じてたのに……」

月夜が涙田の上田遣いで見上げてくるが、今回ばかりは言つたくな
い。

なんかからかわれそうだし。

「修が余計な」と言つからだ

「じめんじめん。後でジースおいつますから」

「しゃーねえな」

別に何か貰いたかったわけではないが、貰えると言つのなら貰つて
おひづ。

「陽君、その話は後でたつぱり聞かせてもらいます」

「黙秘権を使います」

「晩御飯とどつちが大切か、よく考えといてね」

晩飯抜きでも死にはしないが、お腹は空く。
さて、どうしたもんか。

まあ、俺の恋の話なんて聞いても何もおもしろくないんだけじなあ。

「はいはい」

そして、放課後。

「陽君の好きな人が誰なのか、聞かせてよ」

もう、言及回数が多くすぎて正直に言ひづと、言つてしまつた方がマシ
かもしれない。

「まあ、いいけど面白い話じやねえぞ?」

月夜は目を輝かせている。
だから、期待しないでほしい。

「俺は10年ぐらい前から、ずっと好きな人がいるんだよ。初恋だ
つたんだが、もう顔も名前も思い出せねえ」

そう、こないだの夢に出てきたあの子。

どこにかは覚えていないが、一緒にどこかに何かを埋めた子。

その子は今どうしているだろうか。

ほとんど覚えていないのだが、好きだった気持ちだけは何故か残つている。

あの子にもう一度会いたい。

会つて何を話せばいいかななんて分からない。

それに、彼女が俺のことを覚えているかは分からない。

もし、もう一度、彼女に会えたら、小さい時に交わした、未来の約束を守ることが出来るのだろうか。

それもこれも会つてみないと分からない。

それに、俺も思い出さないと本人かも分からない。

「ちゃんと想い出せるといいね」

そう言った、月夜の顔は少し悲しさを感じられる笑顔だった。

彼女を見つけたら、俺は何て声をかけるんだろうな。

思い出せてもないのに、名前を呼ぶんだろうか。

「やうだな」

まあ、そんなことほその時の自分に任せればいいか。

「じゃあ、言つたんだから、俺の分の飯はあるんだろうな」

「ふえつー、もともと陽君の晩御飯の用意もするつもりだったよ？」

れつあまでの」とは何だったんだ。

分かつてたら、こんな恥ずかしいこと言わなかつたのに。

まあ、月夜も今はスッキリした顔になつたらしい。

好きな人（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

「好きです。付き合つてください。」

今、俺がいるのは屋上。

そして、田の前には廊下で、何度かすれ違つたような気がする女子。『気がする』と言つのは、喋つたこともないし、ざつかで見たことがあるかも、ぐらいにしか覚えていないからだ。

「あー、えーっと

「ダメ…でしょうか？」

俺がどう対応しようか悩んでいると、少女は上田遣いで見上げてくれる。

ヤバイ。今のは何という突破力。危うくOKしけた。

「あっ、『めん。俺、好きじゃない人とは付き合えない』

あつぱつと言つ。

だって、相手の気持ちと自分の気持ちが釣り合わない。

そんな状態だと、付き合つてゐるのではなく、片方からすれば、付き合つてもらつてゐると言つた状態だと思う。そんな気持ちで付き合

うのは、失礼だと思つたのだ。

だから、多少はきつい言い方だとしても、言わないといけなかつたのだ。

「そう…ですよね」

涙を目に溜め、無理矢理にでも作った笑顔で答える少女を見ると、罪悪感を感じてしまう。

「ふう」

少女が屋上から見えなくなつたころになつて、緊張の糸が切れたのか、その場に座り込んでしまう。

「陽斗は相変わらずの人氣つぶりですね」

「陽斗君モテすぎて気持ち悪い」

「いや、修の方がモテてるだろ。あと、彩、お前に気持ち悪いと言われる筋合いはない」

修に実はモテると聞いて以来、友達宣言だと思つていた告白が、全てアノ告白だと知つてしまつた。

そうなると考へてしまつのが、中学時代の俺がかなり失礼な人間だつたと言つこと。

「陽君はモテすぎるので、妻としては心配です」

「うん、結婚した覚えがないのに、それだけ妄想を語れるのは一種の病気だ。悪いことは言わねえから、早退して病院言つてこい」

いつもいつも、俺をからかつて月夜は楽しいのだろうか。

「陽斗、もう今週何回田?」

告白されるのが何回田と書つ意味なのだらう。

そう、入学して一ヶ月が経つてゐるからか、突然告白されるのが多くなつたのだ。

「今週はたぶん3回田だな」

「私も3回です。陽君は私が告白されるといぢり思っていますか?」

返事によつては地雷だと瞬時に理解した。

これは、あれだ。『嫌だ』とか答えると、家で氣まずくなるパートンだな。

「早く付き合つてしまえよ。つて思つた」

月夜の顔が二三三三している。だが、田が決して笑つていない。

ヤバイ、殺られる。

「陽君はまだつして付き合わないの?」

「好きでもないのに付き合つのは失礼だと思つたからです」

「なら、好きな人は？」

「『』の前話したとおりです」

あまりの恐怖に、敬語で話してしまっている。
修は『言つたんですね』とか言つてるが、言わせたのはお前だ。

「そりいえば私もね、初恋つて大事だと思つんだあ」

「ソウデスネ」

思わず片言。絶対的な恐怖を前にキャラの一貫性が無くなつてしまつた。

「私もね、初恋の人以外と付き合つ氣はないんだあ」

「はいはい、そりですか。素敵な話ですね」

なんか、どうでもよくなつてきたので、適当な返し。

まあ、普段結婚的なことを言つてゐるのせ、やっぱりからかつてたんだな。

だつて、付き合つ系のは出てきたことねえし。

「といひで修は何回告られたんだ？」

「僕は図書室で一回です」

うわあ、修つてなんか図書室めつちや似合つわ。

たぶん、相手は図書委員とか常連なんだな。

「彩は？」

「〇回」

あつ、こつちにも地雷が潜んでいやがったのか。

回避行動取れずに、直撃しちまつたじゃねえかよ。

こじま、何か気の利いたフォローをしなくては……。

「彩つて、どちらかと云つと男友達だもんな

言つてしまつた後に大いに後悔した。

これは地雷なんてもんじやない。

傷痕弾だ。これは無傷では帰れそうもないな。

「そうですか？僕は明るくて、元気があって、楽しそうで可愛いくと思つますよ？」

「おひ、修よ、ここに来て俺を救済してくれるのか。

だが、一つつひこむ。可愛い以外の3つほどのような違いがあるんだ？言いたいことは全部同じ気がするんだが。

「修君がそういうなら、そういうのね」

真っ赤な顔で俯いている彩は可愛かつた。

まあ、言つたのが修じゃなかつたら、ここまでにはならなかつただ
うひつ。

自宅にて

「陽君つてさあ、初恋の人に会えたたらどうするの？」

「顔とか覚えてないから、会えたか分かんねえからな」

そう、結局の問題はそこにたどり着いてしまつのだ。

「ふーん、じゃあ、思い出すまでは誰とも付き合わないの？」

「まあ、そりなんじゃね」

「じゃあさ……」

月夜は黙り込んでタイミングをつかがつ。

「……大人になつたら、つて約束があつたら、何歳になつたら大人になつたつて判断する？」

夢の中の子と何かを埋めた時も、『大人になつたら』つて約束だつ

たと思づ。

「普通は20歳からだらうけど、俺の中では、一生大切にしたい人ができたら……かな」

少し月夜は俯き氣味に話す。

「……陽君は、その初恋の人のこと、一生大切にしたいって思う？」

「どうだらうな。会つてみないと分かんね」

昔は昔で今は今。今をつくるために昔がある。だが、俺の中での昔と今の彼女の間に流れた年月で、彼女がどう変わったのかは分からぬ。

なら、会つてみないと分からぬのだ。

「だよね。それに……陽君の初恋が私と会つ前かもしれないし、会つた後かもしれないしね」

「ん? 最後の方聞こえなかつたんだが」

『それに』の後が聞こえなかつたが、何て言ったのだろうか。

「何でもないよ。ただ、私ならいいなつて話

何が?つて聞こづと思つたが、月夜はキッチンに小走りで駆けていつてしまつた。

「はあ

何か最近、じつじつ話ばっかだな。

さて、何話で終わらせましょうか。

長くあることも短くあることもどちらもよし。

完結までは書きたいから、無理矢理にでも持つていって、どうしよ。

つてことで

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願ひします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655ba/>

未来の約束

2012年1月12日15時46分発行